

『先生必死になって』

これだけ教育改革が叫ばれている今日にあっても、授業が何も変わっていない先生に出会う。私の出会った先輩達はチョーク一本と教科書での授業が多かったが、今でも同じような授業をしている風景があるのだ。それも若い先生がだ。チョーク一本で、自分の描いた通りに授業を進めていく。子ども達の思考が混乱してもお構いなし。テレビの「世界で一番受けたい授業」までいかなくても、子どもたちが受け身でなく、五感をフルに活用するような工夫ができないかと思ってしまう。

「生徒指導」もそうだ。一昔前の生徒指導は力で押さえれば何とかなった。体育会系の怖い先生が号令をかければ生徒たちは従った。ある生徒指導困難校は、体育会系の先生3人に人事異動で赴任してもらったという話もある。体罰ですら容認される雰囲気があった。禁止と管理で取りしめるのが生徒指導という側面が強かった。未だに同じようなことが繰り返されてはいないか心配になる。

携帯電話の電磁波は強力である。電磁波が与える脳や肉体への影響が将来どのように現れるかデータがまだ蓄積されていないだけに心配という見方もある。性の被害にあう女子生徒の数は予想をはるかに超える。インターネット通信サービスLINE上での仲間はずれが静かに広がっている。チャット機能を使いたいじめが深刻化、いやがらせによる不登校も増えている。

時代はここ数年でどんどん変わっている。危険だから禁止ではなく、「交通事故」にあわない携帯・スマホの使い方を、時代に乗り遅れないように考えていくことが求められている。携帯の指導は禁止ですむほど甘くはない。

新聞や雑誌には先生方へ次のような声が上がっている。こんな声に真摯に耳を傾けることで自身を成長させてほしいものだ。

《保護者の声から》

- ・今後、全ての教員に授業の技量検定を受けてほしい
- ・授業の技量検定は、全員強制にして、1年に1度必ずやって！
- ・教育改革は、まず、先生の意識の問題。先生がどんな考えをしているのか、教頭もだれも知らない。もっと干涉すべきだ
- ・教師自身が良識ある社会人であること。子どもたちは教師の人間性を敏感に感じる
- ・若いころから先生、先生と呼ばれて、自分は偉いと勘違いしてしまうのではないのでしょうか。せめて親は先生と言うのをやめませんか
- ・教員が自分を『教師』と呼ぶのは僭越だ。『師』とは人が評価してくれるものだ
- ・我を忘れて必死になってくれる先生がほしい。その労に報いる賞や金一封があってもいい。賞に心から拍手と感謝を送れる先生が必要です
- ・どこが先生か、親は先生と呼ぶのをやめませんか

- ・すばらしいと思える先生は、ごくごく一握り。先生と呼ばれるに値しない人が本当に多い
- ・先生と呼ぶのは教え子だけでよい。親と教員は対等な立場の社会人だ
- ・会社員は結果を出すという、当たり前の経営感覚を持つのだが、学校の教員にその意識、学力をしっかりとつけるという意識、責任感の全くないのは驚きであり、怒りである
- ・自主自立と放任をはき違えている教員がいる。
- ・子どもの気持ちをくみ取れる先生が少なくなった。子どもに振り回されている
- ・一番気になるのは先生の横着さ。テスト問題が前の年と全く同じだったりする
- ・お前たちが問題ばかり起こすから、家庭訪問だ何だで仕事が山積みで大変だといって、子どもに八つ当たりする先生がいる。自分の指導のいい加減さを棚上げにして、とんでもないことだ。親子で怒りが収まらない
- ・公立校にはいろんな子が通ってくる。でもいろんな子どもを受け止めるだけの力が、今の学校、教師にはない

プロ野球楽天の元監督野村克也さんは著書の中で、選手に対して言い続けてきたことの一つに「野球人たる前に、社会人たれ」を挙げている。野球人としての成長は勿論のこと、人間的な成熟が必要であること。野球人として生きていられる時間は短い。その後の人生のほうがずっと長い。評論家やコーチになったら、これまで以上にコミュニケーションが求められる。お山の大将ではいられないのだと。社会人としてマナーや考え方、指針がないと辛い思いをする。落ちぶれていく元プロ野球選手を多数見てきた野村監督ならではの言葉に聞こえた。

教職員は「井の中の蛙大海を知らず」である。「先生方の常識、社会の非常識」と言われて久しい。管理職は背筋をピシッと伸ばし、緊張感、使命感、責任感をしっかり持って経営に当たりたいものだ。